

佐々木滋先生のご定年に寄せて

片 山 文 保

佐々木滋先生には、先生が青梅キャンパスから日野に移ってこられて以来、同じヨーロッパの言語担当者として親しくお付き合いいただきました。研究室が近いこともあり、当方の部屋に折りあるごとに立ち寄られ、ひとしきり、読み終わったばかりの本、あるいは読んでおられる本について立ち話で論評され、当方はその都度楽しく伺ったものです。

とにかく読書好きで交友関係の広い人だと当初から感服しておりますが、「贈る言葉」の執筆を同僚の編集委員から依頼されたのを機会に、先生にこれまでの人物交流について改めて伺うことにしました。以下はその記録の一部です。

片山：この度、めでたくご定年を迎えられ、四月からあらたな生活を始められますこと、心よりお祝い申し上げます。つきましては、先生がこれまでに築いてこられた広い人物交友関係について、ひとつ交遊録のようなものをお聞かせいただきたいと思います。まずは高校時代から。

佐々木先生：長野県立野沢北高等学校で一年間学び、同じクラスには、日本ペンクラブの現会長である吉岡忍がいます。彼とは今でもたまにみんなであつたりします。彼はノンフィクションライターで、分野はルポルタージュです。

高校二年に名古屋学院に編入入学し、この時期に最も大きな影響を受けたのは、ミッション系高校であったため週一回宗教の時間があったのですが、その教師だった高尾利数氏の話でした。先生は当時は、まだ出来立ての名古屋学院大学の教授でしたが、その後、関東学院大学神学部に移られ、おりしも学園紛争の時代に法政大学第二教養部に移られました。神学部が廃止されたためです。

片山：大学時代は如何でしたか？

佐々木先生：中央大学の独文に入学しましたが、独文には年配者順では、高橋健二、山口忠幸、橋本文夫、山口四郎、生松敬三、福田宏年、五十嵐敏夫、小塩節、前野の諸先生方がおられ、卒論指導は山口忠幸先生でした。難しいといわれる「クロップシュトック」を扱いました。法政の高尾利数先生のところでも聴講したものです。五十嵐先生とはその後、私のドイツ留学時代に、ベルリンで幾度もお会いしました。当時信州大学におられた中野和朗先生も一緒にお会いしたものです。五十嵐先生は東ドイツが留学先でした。私は西ベ

ルリンのベルリン自由大学（FU）を留学先としたのです。

留学期間中（1973～1976）にいろいろ影響を受け勉強になったことは多々ありますが、Bahman Nirumand氏を先ず挙げます。氏は今でも健在でマスコミにも登場します。氏はイラン人でドイツ留学中は「ゲーテとハフィー」で学位を取られ、テヘランの大学でも教職にありましたが、パーレビ国王に対する学生運動に関わったりしたため、当時、再び西ドイツに戻っていたのです（西ドイツの有名な学生運動家ドゥチュケなどのことを調べるとニルマンド氏の名前もみられます）。小生は氏のドイツ語クラスで教わったのです。氏は今でもベルリンでジャーナリスト・作家として活動しているイラン通の知識人です。

他には、エムリヒ教授がいました。彼は「カフカ」についての著作がありますが、小生はバロック文学の講義を聴きました。もう一人是非とも挙げておくべき人はRuediger Safranski氏です。彼はそのころLehtenと二人で50人くらいのゼミを開いていましたが、これは人気もあり活発でした。ザフランスキ氏も今ではドイツの名士で著書も多数あり、いくつかは邦訳もあります。「ハイデッカー」が知られています。

片山：ドイツから帰国されてからは如何でしょう。

佐々木先生：帰国後は一年くらい日本電波ニュース社事業部のお手伝いとして、もっぱら東欧アーティストの公演について回る仕事しました。これは有名なチェコフィルハーモニーであったり、ハンガリーの子供合唱団だったりします。いずれもドイツ語通訳として。

この日本電波ニュース社はその支社が、ハノイ、プラハといった共産圏にあって、特にベトナム戦争時には北側からの撮影映像は貴重だったようです。先ごろ、このプロデューサーが、ひとりのイラク人の子供の目の手術を日本で終えて、イラクに連れていったときに凶弾に倒れた事件がありましたが、それが橋田信介さんでした。

橋田さんとは小生は帯独中に一度会っています。兄の仏文の同級に加藤博氏がありますが、氏も電波ニュース社で橋田さんと同僚でした。その二人が、確か1975年頃、ポーランドが日本人観光客を大いに誘致したがっているとのことで、日本のジャーナリストを大勢招待したことがありました。大いにポーランドを取材し、日本でPRしてくれということだったのでしょう。そのあとベルリンにいた小生に連絡があり、フランクフルトで会いましょうということで、二人と会ったわけです。

橋田さんはパリ経由で帰国し、加藤さんと小生はドイツ各地のお祭りの取材やヴァイオリンを作る職人の仕事取材などを回って、それからパリに行ったのです。つまり小生が車があるから、それを小生が運転し、取材の助手も務めるというものです。カメラはベルハウエルの三本レンズ付きフィルム16mmでした。助手は照明係です。

パリではNHKの柏倉康夫さんが待っていてくれて、夕食をピガール広場近くのあずま屋風テラスでご馳走になったのです。当時、柏倉さんは半年以上続いている南仏の某工場ストライキを取材中でしたが、出来立ての超音速コンコルド機に試乗してきたばかりだとか言っていました。パリで泊まったホテルもジャーナリストばかりが泊まる、タイプライターの音が鳴り続ける場所でした。

柏倉さんと加藤さんは会社が違うのになぜ一緒に？と思われましょう。二人は、歴史的なサイゴン陥落の時の映像を共同で香港上空にある衛星を使って日本に送ったのです。

以来、知り合ったのでしょうか。もともと日本電波ニュース社はNHKを去った人が始めたとか？事業部はいわゆる、アーティストの呼びやさんです。帰国後の話のはずが、滞独中のことになりました。

片山：では、大学院時代は如何でしたか？

佐々木先生：大学院は修士を明治大学で二年間学びました。当時の教授陣は野島正城、堀内明、熊田力雄、池田、吉田正彦などの諸先生です。小生は熊田先生に指導をお願いしましたが、先生の専門はゲーテです。小生の修論はMax von der Gruen（マックス・フォン・デア・グリューン）の『鬼火と焰』を扱いました。

この頃、大学とは別に佐久のひとびとと一緒に同人雑誌『黒斑（くろふ）』を刊行しました。ほぼ毎月号、佐久出身の文芸評論家、北欧文学者、山室静氏の玉稿をいただき、小生は翻訳を、もっぱらギュンター・ヴァルラフ（Guenter Wallraff）のルポルタージュのものをのせました（「過去の克服」、「鋼管工場にて」、「クレーン操者」、「アル中患者」、「ベルトのわきで」など）。

同人雑誌のことではもうひとつあります。それは『詩壇』というもので、中心となっている人は草壁焰太しです。氏は「市井社」という出版社も営んでいます。かつて所沢にいたころ知り合ったのでした。つられて自分の詩なども載せたり、ドイツの現代詩を載せたりしました。

この雑誌も終刊を迎えましたが、今は「五行歌」を全国組織にまで広げる人となりました。二年前佐久の五行歌会員が小諸のホテルに集まるということで久しぶりに草壁氏にお会いしました。小生が法政大の夜間を教えていたころは、市井社が市ヶ谷でしたからよく顔をだしたものです。出版を他でやった時（美術公論社）は、うちを使わないでみずくさいともいわれました。片山先生もご覧になったかもしれませんが、モノレール駅構内のポスターに五行歌募集のポスターが数か月前にありましたが、五行歌は大学生の間にまで進出しています。

片山：大学院を修了されてからは？

佐々木先生：二年間の大学院修了後は半年ぐらいで最初の非常勤先がありまして、それはかつての神奈川県立衛生短期大学でした。相鉄二俣川にありました。以後、法政大二部、東京理科大学理工学部（千葉県野田市）、明星大学、工学院大学（新宿校・八王子校）、法政大学社会学部・経済学部（町田キャンパス）、東京学芸大学などのドイツ語非常勤を、平成4年青梅校の専任職に決まるまで続け、青梅に決まった後はいくつかを残して（法政第二部、学芸大）ほかは辞めました。

語学以外ではドイツ語を23年間、実践女子大学で教えていたのですが、その間に教えた学生は述べ2000名をこえます。この大学では岡野治子先生（のち広島大学教授、清泉女子大学長）に大変お世話になりました。

青梅では15年間過ごし、小生のみ先に日野のニューキャンパスに来たのでした。ここからは片山先生もご存知かとおもいます。

片山：想像以上に多彩な交友経験をお持ちですね。驚きました。当方など社交性に欠けてますから先生の十分の一にも及びません。では次に、ご趣味について伺いたと思います。

佐々木先生：こうしたこと以外で行っていることは、野菜づくりでしょうか。あとは、生家（八千穂）の家屋・土蔵の管理、庭、畑の雑草取りなど。森林、畑、お墓の管理は小生が相続したため（1500坪くらい）やらなければなりません。これが定年後の課題です。兄たち三人はすでに他界しました。結局、わたしが相続したわけです。これは負の遺産かもしれせん。

趣味のカメラは名古屋学院のクラスメイト池戸重信くんが大のマニアで、小生が平成4年に佐久へ引っ越してくる前、あちこち一緒に撮影に行ったものです。写真撮影は今でも田舎の写真クラブでつづけています。たまにみんなで泊まりででかけます。去年の夏は高野山・熊野三社で二泊しました。

片山：ご趣味の方も多彩で活動的ですね。では、最後になりますが、ご研究、読書の他に、今後も続けて行かれることなどについてお聞かせ下さい。

佐々木先生：そのほか、今続けているものに、田舎の喫茶店でやるサイエンスカフェがあります。月一度ですが、百回をかぞえました（8年）。いろんな発表者がきます。発表者に報酬はないのですが。参加費はコーヒ付きの500円です。これも高校の同級生、しかもクラスメイトら5人で発足したのです。

中心となってくれる人物は、Uターン者、荻原武治君で、バシフィックコンサルタンツ社にいた男です。定年後、実家の佐久市瀬戸にもどってきたわけですが、田畑を耕しています。彼の専門は橋（ブリッジ）だったそうで、在職中は神奈川県厚木市の七沢森林公園入り口の橋を担当したとか。

サイエンスカフェは「土知の森」と銘打っています。最初の発表者は同じくクラスメイトであった加藤行雄君のANAパイロットの体験談（Boing 747パイロットとして）でした。こんなわけで、これは毎回楽しみで一月（2019年1月）は佐久市立図書館長の話です。

片山：盛りだくさんの楽しいお話を有り難うございます。ご退職後もどうぞご健康でますます多彩なご交友を広げてください。そして時折日野にもいらして、本のこと人物のことなどお聞かせ下さい。明星での永年のおつとめ、本当にお疲れ様でした。最後に、先生のご健康とご多幸を心よりお祈り致します。